

主 題：キリストは必ず再臨される 2

聖書箇所：ペテロの手紙第二 3章8-10節

小アジア、今のトルコに当たりますが、そこに存在した幾つかの教会に宛ててペテロは大切なメッセージを送っています。それらの教会に属する兄弟姉妹たちを愛していたペテロは、彼らの信仰が成長することを願ってこの第二の手紙、そして、第一の手紙を送ったことを私たちは見て来ました。彼らが教会の中に入り込んで来たにせ教師たちや、また、あざける者たちの惑わしに惑わされないためにどうすればいいのか？その対策をペテロは彼らに教えるのです。

どんな出来事に遭遇しても、正しい理性をもって主の前に正しい判断を行って行動することをペテロは願っていました。確かに、いろいろなことが周りに起こって来ますが、神が望んでおられることは、その時々にあって彼らが正しい選択をしていくことです。それを実践するためにペテロがしようとしたことは、この信仰者たちの心を今一度奮い立たせることです。それが必要だと彼は心から思うのです。そこで、ペテロは新しい真理ではなく、もうすでにこの教会の兄弟たちが学んでいた、知っていたみことばの真理をしっかりと思い出すように、そして、それを忘れないようにと彼は働くのです。

なぜ、みことばに立つことが大切なのか？それはこの神のみことばである聖書だけが真理だからです。私たちもそのことをしっかりと学んでおかなければなりません。私たちに必要なのは人間の知恵ではありません。必要なのは神の知恵です。人間のことばではなく神のことばが必要なのです。時代がどのように変わろうとも変わらないのは神のことばです。この真理です。私たちはそこにしっかりと立つことが必要です。みことばに立つことによって、みことばが私たちの物事を判断する物差しになります。私たちがいろいろな教えを聞くときに、このみことばをもって、果たしてそれは聖書のとおりなのかどうかとそのことを吟味することができます。どの時代にあっても、主の恵みによって救いに与ったひとり一人に必要なことは、神のみことばにしっかりと立ち続けることです。

A. 来臨の否定に対して

あざける者たちが教会に入り込んで来て、彼らは主の来臨を否定をしました。ほんとにイエス・キリストは戻って来るのか？と、そのことが彼らが最初に教会の人々を惑わしたことです。4節にあったように「キリストの来臨の約束はどこにあるのか。父祖たちが眠った時からこのかた、何事も創造の初めからのままではないか。」、何も変わっていないではないか？と言います。イエス・キリストが来臨されると言っているけれど、それはだれかが勝手に作り出したことではないかと言うのです。

そこでペテロはこの人たちの教えがいかに聖書に反するものであるかということを確認して行くのです。ペテロは聖書のみことばから、しかも、読者たちがもうすでに知っているみことばを使いながら、彼らに今一度学んで来たことを思い起こさせようとするのです。ペテロは彼らの「何事も創造の初めからのままではないか。」ということばに対して、ノアの洪水のことを持ち出しました。歴史的に見て、実際に、洪水をもってこの世界をさばかれたと。同時に、次は洪水ではなく火によってこの世はさばかれると、そのことを彼は記すのです。

確かに、聖書を見ると、神は火をもって世をさばくということを約束しておられます。イザヤ書66章にも「**実に、【主】は火をもってさばき、その剣ですべての肉なる者をさばく。【主】に刺し殺される者は多い。**」（66：16）と書かれています。ですから、ペテロが勝手に思いついたことではなく、実は、旧約聖書に「火によるさばき」は預言されていた、教えられていたということです。思い出しなさいと言います。そして、新約聖書にも次に起こるさばきが「火による」と教えられています。ヘブル10：26-27「**もし私たちが、真理の知識を受けて後、ことさらに罪を犯し続けるならば、罪のためのいけにえは、もはや残されていません。：27 ただ、さばきと、逆らう人たちを焼き尽くす激しい火とを、恐れながら待つよりほかはないのです。**」、神が備えてくださったすばらしい救いを拒み続けて行くな、あなたに残っているのはあなたが受けるべきさばきを恐れながら待つしかない、しかも、そのさばきは「**焼き尽くす激しい火**」であると言います。

ですから、確かにみことばは、次に起こるさばきは「火による」ものだということを教えています。ペテロは私たちに7節で「**しかし、今の天と地は、同じみことばによって、火に焼かれるためにとっておかれ、不敬虔な者どものさばきと滅びとの日まで、保たれているのです。**」と言って、必ずさばきがあることを教えました。神に逆らう者たちには必ずそれにふさわしい報いが訪れます。そして、それだけでなく「**さばきと滅びとの日まで、**」と「**滅び**」ということばが付け加えられています。さばかれた者たちは「滅び」、すなわち、永遠にその苦しみを地獄で味わい続けるということです。そのことを意味することばを使ってい

ると、私たちは前回見ました。

ですから、キリストの来臨を否定する者たちに、彼らの存在を知っていたペテロは、それがいかに聖書の教えに反するものかを明らかにするのです。

B. 来臨の遅れに対して

同時に、偽教師たちやあざける者たちは、来臨の遅れに対して批判します。「どうしてキリストは来臨しないのか？」と。そこで、ペテロは聖書にある二つの事実を挙げることで、読者たちの記憶を今一度呼び覚まそうとするのです。

1. 誤った時間観念 8節

彼らは間違った時間観念をもっているのです。8節に「しかし、愛する人たち。あなたがたは、この一事を見落としてはいけません。すなわち、主の御前では、一日は千年のようであり、千年は一日のようです。」とあります。ペテロは私たちが考えている時間と神の時間とは全く違うということを言っています。実は、このことをペテロは旧約聖書のみことばを用いて説明しています。なぜなら、読者たちが知るべきことは新しい真理ではなくもうすでに彼らが知っていることを思い起こさせるためだったからです。ですから、旧約聖書のみことばをもって今一度そのことを思い起こさせようとしているのです。詩篇90：4に「まことに、あなたの目には、千年も、きのうのように過ぎ去り、夜回りのひとときのようなものです。確かに、人間から言えば「千年」は非常に長い時間です。でも、神にとってはそれは「一日」のようなのです。なぜなら、神は永遠から永遠に存在しておられる方だからです。私たちはわずかな時間の中で生きています。この地上での生活は永遠から見るとほんの点よりもまだ小さいものです。

ですから、私たちはある何年間の中の何年と考えてしまいます。私たちは余りにも限られたスパン、その時間の枠の中で生きています。でも、神はそれを超越して永遠から永遠に存在しておられます。ですから、神の時間を人間の時間観念で測ろうとする、そこに問題があることをペテロは明らかにするのです。だから、時間について私たちと同じように考えないから神はおかしいなどとは言えない、時間に関する観念は全く違うからと言うのです。

2. 誤った神観念 9節

二つ目は9節に書かれていますが、「神観念」が違うということです。「主は、ある人たちがおそいと思っているように、その約束のことを遅らせておられるのではありません。」、なぜ、人々がキリストの再臨が遅れていると思ったのか？ずっとそのことを待っているのにキリストは帰って来ないからです。確かに、今から2000年前、主イエス・キリストが十字架で亡くなったときのことを思い出してください。イエス・キリストはその後よみがえって来られ、40日間地上におられ、肉体をもってご自分がよみがえったことを明らかにされました。そして、その後、主はオリーブ山から天に凱旋していかれました。弟子たちがその光景を見ているときに天使がこのように告げます。使徒の働き1：11「ガリラヤの人たち。なぜ天を見上げて立っているのですか。あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは、天に上って行かれるのをあなたがたが見たときと同じ有様で、またおいでになります。」と。

ですから、ペテロにしてもパウロにしても、当時のクリスチャンたちは自分たちが生きている間に、イエスの再臨があると信じていました。そのような希望をもって彼らが生きていたということは彼らの書簡に見て取ることができます。「今日かな？今日かな？」と思いながら彼らは待っていたのです。10年経ち50年経ち、百年経ち500年経ち、千年が経っても約束されていたことが起こらない…。普通の人が思うことは「あの人は約束を守らない！言っていることが起こらないではないか！」です。約束を待っている時間が長いほどに「あの人は怠慢な人だ！もしかするとあの人は忘れてしまったのかもかもしれない。」と、そのように人間は考えてしまいます。でも、ペテロは「神はそうではない！」と言うのです。

つまり、彼らは神に対して人間と同じ考え方を適用していることが問題なのです。こうして長く待っているのに何も起こらない、キリストは帰って来ると言ったのに帰って来ない、神は怠慢なのかもしれない、約束を忘れたのかもかもしれないと。彼らの問題は、彼らは神を神として見ていないということです。もし、彼らが神を正しく見ているなら、神は必ず約束を守られる、必ず神の約束は成されると、そのように自信をもってその時を待ち続けていたでしょう。神は必ず約束を守られるお方です。そのことはもう聖書のみことばを通して繰り返し教えられています。さばきがあると言われたならさばきはありました。そして、これから後に新たなさばきがあると言われます。イザヤはこのように言っています。イザヤ書25：1「【主】よ。あなたは私の神。私はあなたをあがめ、あなたの御名をほめたたえます。あなたは遠い昔からの不思議なご計画を、まことに、忠実に成し遂げられました。」と。私たちは聖書を通して、確かに、神はこのとおりに為して来られたことを知ります。

だから、私たちは「死んでも生きる」という確信をもって生きることが出来るのです。なぜ、私たちはイエス・キリストを信じた人たちに「あなたは死んでも生きています」と、葬儀の場で私たちはどうして

「あなたは間違いなくこの先に召された方と同じように天に行くことができます。なぜなら、イエス・キリストを信じているから」、天に召された人に対しても「この人は間違いなく神のもとに行った」と言えるのでしょうか？この約束は私たちが勝手に与えるのではなく、聖書にそのように記されているからです。神は約束を守られるお方です。それが私たちが信じた神です。それが聖書が私たちに教える唯一真の神です。

ですから、こうして聖書の教えに反論するあざける者たち、にせ教師たちがいました。ペテロは彼らの間違いを明らかにしたのです。その後でペテロは、では、なぜ、キリストの来臨は遅れているのか？その理由を説明していきます。

○なぜ、キリストの来臨が遅れているのか？まだ、さばきが来ないのか？

1) 神の忍耐 : 忍耐深くあられる

9節の続きをご覧ください。「かえって、あなたがたに対して忍耐深くあられるのであって、」と記されています。ペテロは「実は、キリストの来臨が遅れているのは神の忍耐だ。神が忍耐深くあられるのでキリストはまだ戻って来られないのだ。」と言うのです。「忍耐深くあられる」ということばは新約聖書に10回出て来ます。

・「猶予」 : マタイ18章に、1万タラントの借りを持っていた人が主人に赦してもらった。赦された彼は百デナリ貸していた友人にそれを返すようにと責める記事があります。そこで1万タラント借りていた者が主人に対してこう言っています。マタイ18:26「それで、このしもべは、主人の前にひれ伏して、『どうか猶予ください。そうすれば全部お払いいたします』と言った。」と。この「猶予」が「忍耐深くあられる」と同じことばです。

・「待つて」 : また、百デナリ借りていた者が18:29「彼の仲間は、ひれ伏して、『もう少し待つてくれ。そうしたら返すから』と言って頼んだ。」と、「待つてくれ」も同じことばです。

・「寛容」 : Iコリント13:4「愛は寛容であり、愛は親切です。また人をねたみません。愛は自慢せず、高慢になりません。」、Iテサロニケ5:14「兄弟たち。あなたがたに勧告します。気ままな者を戒め、小心な者を励まし、弱い者を助け、すべての人に対して寛容でありなさい。」、ここに見る「寛容」も同じことばです。

ですから、神は待つておられるのです。何を？9節に続いて「ひとりでも滅びることを望まず、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられるのです。」と書かれているとおりです。つまり、神はひとりでも多くの罪人がこの救いに与るようにと望みながら、忍耐をもって、罪人が救いを求めて神のもとに出て来ることを待つているということです。私たち先に救われた者が覚えなければいけないことは、あなたがこの救いに来ることができたのは、神が忍耐をもってあなたを待つていてくださったということです。なぜなら、私たちのだれひとりとして救いにふさわしい者はいないからです。私たちにふさわしいのは「滅び」です。でも、神はその私たちを忍耐をもって寛容をもって待ち続けてくださったのです。そして、感謝なことに、私たちはこうして救いへと招かれたのです。

ペテロが教えることは、なぜ、キリストはまだ帰って来られないのか？それは神が忍耐をもって、ひとりでも多くの罪人が救いに与るように、そのことを願って待つておられるということです。神の忍耐は完全です。次の二つの箇所を見てください。ローマ3:25「神は、キリスト・イエスを、その血による、また信仰による、なだめの供え物として、公にお示しになりました。それは、ご自身の義を現すためです。というのは、今までに犯されて来た罪を神の忍耐をもって見のがして来られたからです。」、ローマ9:22「ですが、もし神が、怒りを示してご自分の力を知らせようと望んでおられるのに、その滅ぼされるべき怒りの器を、豊かな寛容をもって忍耐してくださったとしたら、どうでしょうか。」。

2) 神の愛・人間の愛

同時に、ペテロは「神の愛」について教えます。

(1) 神は罪人の死に心を痛められる : 「ひとりでも滅びることを望まず、」、これほど神に逆らい続けているにも拘わらず、神に背を向けて好き勝手に歩いて来たにも拘わらず、神はなおも私たちのことを愛してくださったのです。神が望んでおられないことは「ひとりでも滅びること」です。そして、神が望んでおられることは「すべての人が悔い改めに進むこと」です。この「進むこと」という動詞は「場所を与える」という意味です。ですから、ここでペテロが言うことは、すべての罪人が自分の心に悔い改めの場所を与えること、そのことを神が望んでいるということです。ひとり一人が神の前に自らの罪を心から悔い改める、その場所を神に提供するのです。そのときにその人には赦しが与えられます。心を開き神の前に悔い改めて救いをいただくなら、私たちはこの完全な神の救いに与るのです。

皆さん、思い出してください。エゼキエル書33:11に「彼らにこう言え。『わたしは誓って言う。——神である主の御告げ——わたしは決して悪者の死を喜ばない。かえって、悪者がその態度を悔い改めて、生きることを喜ぶ。悔い改めよ。悪の道から立ち返れ。イスラエルの家よ。なぜ、あなたがたは死のうとするのか。』」とあります。少し戻って、18:23「わたしは悪者の死を喜ぶだろうか。——神である主の御告げ——彼がその

態度を悔い改めて、生きることを喜ばないだろうか。」と、少なくとも、みことばが教えていることは、罪人が神に逆らい続けた状態で永遠の地獄に至ることを神は喜ばれないということです。私たちなら、とても嫌な人や私たちの敵がいてその人たちが滅んでしまうなら大喜びするかもしれません。でも、神は敵であった私たち罪人が永遠の滅びに至ることを喜ばれないのです。却って、神はそのことを悲しんでおられます。こういう神だと聖書は私たちに教えるのです。I テモテ 2 : 4には「神は、すべての人が救われて、真理を知るようになるのを望んでおられます。」と、罪人が救いに与ることを神はどれ程望んでおられることでしょう。

(2) 神は罪人の救いを喜ばれる : もう一度エゼキエル書を見てください。神は罪人の死に対して心を痛められるだけでなく、罪人の救いをお喜びになるのです。18 : 23は先に見ました。「…神である主の御告げ——彼がその態度を悔い改めて、生きることを喜ばないだろうか。」と、18 : 32にも「わたしは、だれが死ぬのも喜ばないからだ。——神である主の御告げ——だから、悔い改めて、生きよ。」とあります。

パウロがアテネに行ったときの記事は使徒の働き 17章にあります。17 : 30に「神は、そのような無知の時代を見ごころおられましたが、今は、どこでもすべての人に悔い改めを命じておられます。」と書かれています。旧約聖書を見ても、こうして新約聖書を見ても、私たちが救いに与るためには悔い改めが必要だということはもう十分お分かりになったでしょう。「ただ何となくイエス・キリストを信じる」というのでは、その人からその罪が完全に洗い清められるということは有り得ないのです。聖書を見ると、神が私たちに望んでおられることは、私たちが自らの罪に気付いて、その罪から離れることを望み、同時に、自分の力ではそれができないことに気付いて、神が備えてくださった完全な救いを心から受け入れて、この方に従っていこうと決心することです。自分の歩みが間違っていたことに気付いて正しく歩んで行こうとするのです。方向を変えるのです。これが「悔い改める」ということです。

でも、多くの場合、悔い改めることなく、ただイエスを信じてそれで良しとしています。今見て来たように、みことばは私たちに悔い改めの必要性を教えています。自分の罪深さに気付いていない人がどうして救いを求めるでしょう？自分は神の前に罪を犯して来た罪人であり、自分で自分を救うことのできないどうしようもない罪人であることに気付かないで、どうして神が備えてくださった完全な救いに心を開くことができますか？私たちは生まれながらに自分には救いなど必要としない、自分はそれ程悪い人間ではないと思っています。でも、何とか天国にいきたいからイエスを信じよう…というのは、聖書が教えている救いではありません。

私たちがみことばから教えられ、また、神のみわざによって、クリスチャンである私たち自身が経験したことは、神が働き、みことばを用いて私たち自身の罪深さを悟らせてくださったことです。そして、どんなにもがこうとどんなに苦しもうと、どんなに心を変えようとしても、悲しいことに、私たちは自分の心を変えることはできませんでした。そのことを悟らせてくださり、希望の全くないその時に、私たちはイエス・キリストにある希望を見るのです。十字架で私たちの身代わりとなって死んでくださったイエス・キリスト、私たちが受けるべきさばきを代わりに受けてくださり、そして、約束どおり、その死から三日後に敢然とよみがえって来られた約束の救世主イエス・キリスト、この方に私たちの希望があるのです。だから、自分の罪を悔い改めて、この方を心から受け入れて、この救い主に従っていくのです。悔い改めがあって、そして、救いが与えられるということはみことばが明らかにすることです。今も私たちはそのことを見て来たのです。

ペテロも私たちに教えてくれました。神が何を望んでおられるか？「ひとりでも滅びることを望まず、すべての人が悔い改めに進むこと」です。悔い改めに心を与えるようにと。もし、あなたがすでにクリスチャンであるならこのことはもう為さったことです。まだ、イエスを信じておられない方がいるなら、あなたが神の前に悔い改めて、この救い主イエス・キリストを心から受け入れ信じるときにあなたは新しく生まれ変わります。同時に、神はその救いを喜んでおられます。ルカの福音書 15 : 7に「あなたがたに言いますが、それと同じように、ひとりの罪人が悔い改めるなら、悔い改める必要のない九十九人の正しい人にまさる喜びが天にあるのです。」とあります。天使たちが喜び神が喜んでおられるのです。

ですから、確かに、みことばは私たちに「罪の悔い改め」とその後のすばらしい救いを心から受け入れることの大切さを教えています。神は罪人が永遠の滅びに至ること、地獄に至ることをお喜びになりません。神はすべての人が悔い改めに心開くように、救いに与るようにと、そのことを願っておられます。でも同時に、すべての人がこの救いを受け入れるのではなく、拒み続けるということも神はご存じです。エルサレムに対してイエスは言われました。マタイ 23 : 37「ああ、エルサレム、エルサレム。預言者たちを殺し、自分に遣わされた人たちが石で打つ者。わたしは、めんどりがひなを翼の下に集めるように、あなたの子らを幾たび集めようとしたことか。それなのに、あなたがたはそれを好まなかった。」と。このように自らの意志で神を拒み続ける人たちがいること、確かにこれは現実です。

私たちはこの救いを知らない人たちに救いがあること、罪の赦しがあること、永遠のいのちが与えら

れることを語りますが、世の人たちはそれを歓迎しません。不思議です。自分で自分を生まれ変わらせることもできない。自分のことを知っている私たちは自分の心がどれ程汚れているかを知っています。自分で自分を変えられない以上、自分で救いを得ることは不可能です。だから、神は備えてくださったのです。でも、そのメッセージを聞いても人々はそれを受け入れようとしません。

確かに、神はすべての人が救いに与るようにと願っておられますが、その救いを拒むのは私たち人間です。みことばは神の愛とともに、私たち人間の愚かさ罪深さを私たちに教えてくれます。どんなに神が私たちを愛しあわれみ、忍耐をもって救いを備え救いに招こうと、そのように働かれていることか。人間がそれを拒み続けるのです。

さて、今日のテキストをもう一度見てください。こうして、なぜ、キリストの来臨が遅れているのかを説明します。それは一人でも多くの罪人が救いに与ることです。そして、神は今もそうして待ってくださっているのです。でも、最後のひとりが救われるときにそのすべてが終わります。

3. さばきの確実性 10節

10節を見てください。この後に起こるさばきについて記しています。「しかし、主の日は、盗人のようにやって来ます。その日には、天は大きな響きをたてて消えうせ、天の万象は焼けてくずれ去り、地と地のいろいろなわざは焼き尽くされます。」、ペテロはここで改めて、さばきは確実に訪れること、さばきの日が確実に来ることを教えるのです。先ず見ていただきたいのは「主の日」ということばです。

1) 「主の日」とは？ : 神がさばきのために歴史に直接的に介入されることです。「主の日」というとある特定の日だけを指しているように思いますが、そうではありません。そこには「さばき」が含まれるのです。

・地上再臨＝主イエス・キリストがさばきをもたらすためにこの地上に戻って来られるときです。主イエス・キリストは地上に帰って来られる、地上再臨のときです。そのときに神はさばきを下されます。旧約聖書の預言者イザヤは「:6 泣きわめけ。【主】の日は近い。全能者から破壊が来る。」、「:9 見よ。【主】の日は来る。残酷な日だ。憤りと燃える怒りをもって、地を荒れすたせ、罪人たちをそこから根絶やしにする。」(イザヤ書13:6、9)と預言しています。ヨエル書1:15にも「ああ、その日よ。【主】の日は近い。全能者からの破壊のように、その日が来る。」とあります。ゼパニヤ書1:15には「その日は激しい怒りの日、苦難と苦悩の日、荒廃と滅亡の日、やみと暗黒の日、雲と暗やみの日、」と書かれています。いずれにせよ、旧約聖書では「主の日」というのは「神からのさばきが下るとき」だと教えています。

・最後の審判＝千年王国が終わった後、最後の審判が為されます。黙示録20章に記されていました。20:7-13「:7 しかし千年の終わりに、サタンはその牢から解き放され、:8 地の四方にある諸国の民、すなわち、ゴグとマゴグを惑わすために出て行き、戦いのために彼らを召集する。彼らの数は海への砂のようである。:9 彼らは、地上の広い平地に上って来て、聖徒たちの陣営と愛された都とを取り囲んだ。すると、天から火が降って来て、彼らを焼き尽くした。:10 そして、彼らを惑わした悪魔は火と硫黄との池に投げ込まれた。そこは獣も、にせ預言者もいる所で、彼らは永遠に昼も夜も苦しみを受ける。:11 また私は、大きな白い御座と、そこに着座しておられる方を見た。地も天もその御前から逃げ去って、あとかたもなくなった。:12 また私は、死んだ人々が、大きい者も、小さい者も御座の前に立っているのを見た。そして、数々の書物が開かれた。また、別の一つの書物も開かれたが、それは、いのちの書であった。死んだ人々は、これらの書物に書きしるされているところに従って、自分の行いに応じてさばかれた。:13 海はその中にある死者を出し、死もハデスも、その中にある死者を出した。そして人々はおのおの自分の行いに応じてさばかれた。」

千年の終わりにサタンがその牢から解き放されて人々を惑わすのです。そして、最後に、神との戦いが為されるわけです。そして、「天から火が降って来て、彼らを焼き尽くした。」とあります。最後の審判がこのように起こるのです。

ですから、皆さん * 「主の日」にはこの二つのさばきが含まれている ということです。

2) 「主の日の到来」 : では、この「主の日」がどのように到来するのか？ 10節に「主の日は、盗人のようにやって来ます。」と書かれています。実は、このことはIテサロニケ5:2、3でパウロが教えていることです。「:2 主の日が夜中の盗人のように来るということは、あなたがた自身がよく承知しているからです。:3 人々が「平和だ。安全だ」と言っているそのようなときに、突如として滅びが彼らに襲いかかります。ちょうど妊婦に産みの苦しみが臨むようなもので、それをのがれることは決してできません。」と。ですから、盗人のように、予期せぬときにこの出来事が起こるのです。「主の日」はそのようにして到来すると言っています。10節を見ると、ペテロはこの出来事は確実に起こると、そのことを強調しています。

* 「主の日」についての詳細を見ていきましょう

10節はこのように続きます。「その日には、天は大きな響きをたてて消えうせ、天の万象は焼けてくずれ去り、地と地のいろいろなわざは焼き尽くされます。」と、ここには三つのことが記されています。

3) 「主の日」の出来事 :

・天は大きな響きをたてて消え失せ＝「天」とは存在するすべての天体であるこの宇宙です。それが

「消え失せる」と言います。これは「消えて無くなる」ということ、すべて無くなってしまって空間だけが残ると、そういうことではありません。実は、このことばは「現状が過ぎ去って別の状態になること」です。その形状も構造もすべてが根本的に激変する様子です。その様子が記されています。恐らく、ペテロはこのことを主から教えられて一生懸命記したのでしょう。ヨハネもそうだったでしょう。大変難しいギリシャ語だったと思います。でも、少なくとも私たちは、どんなことが起こるのかを少しだけ知ることができます。イエスが言われたこと「この天地は滅び去ります。」(マタイ24:35a)、まさに、そのことです。この後、新天新地が新たに創造されます。今の天と地が完全に滅んで新天新地が誕生する、そのときの出来事がここに記されているのです。

現存の宇宙が過ぎ去って別の状態に移っていくときに何が起こるのか？「大きな響きをたてて」と、これは「大騒音」です。恐らく、このときに被造物が今までに聞いたこともない大音響が響き渡るでしょう。

・天の万象は焼けてくずれ去り＝天にあるあらゆるもの、「万象」と訳されていることばは「宇宙万物の基本的物質、構成している要素」のことです。宇宙に存在するすべてです。それが「焼けてくずれ去る」と言います。これはまさに火山のようにその内側からの熱によって燃え尽きてしまうということです。そのような意味をもったことばです。ですから、どこかから火が降って来るのではなく、それぞれを構成している要素のその内側から熱が出てすべてを焼き尽くしてしまうのです。このことばも「破壊する、解体する」という意味をもつことばです。そして、全く新しいものへと移っていくのです。

・地と地のいろいろなわざは焼き尽くされます＝「地」とは罪に染まったこの「地」です。地球上のすべてです。それが「焼き尽くされて」しまいます。「地のいろいろなわざは」とありますが、これは「この地上において人間が成し遂げたいろいろな偉業、功績」です。人間が成したすばらしい発明かもしれません。人間が造り上げたすばらしい建造物かもしれません。それがすべて焼き尽くされてしまうのです。「焼き尽くす」とは面白いことばです。これは「発見すること」です。すべてのものが神の前に明らかにされて、それが神によってさばかれるのです。つまり、こういうことです。人間はこういうことがきつと価値があると思います。でも、必ずしもそれが神の前に価値あるかどうか、どんなにすばらしい建物を建てても、それよりももっと価値あるものがあるのです。

私たちににとって最も価値あることとは？神の栄光のために生きることです。コリント人への手紙の中でパウロが教えるように、いつか私たちは信仰者として生きて来たその歩みのすべての価値が明らかにされる時が来るのです(1コリント3:13「各人の働きは明瞭になります。その日がそれを明らかにするのです。というのは、その日は火とともに現れ、この火がその力で各人の働きの真価をためすからです。」。)どんなことをしたかではない。神の前に本当に価値ある生き方をして来たかどうかです。言い方を変えるなら、私たちが信仰者として行なって来たこと、生きて来たこと、それが神の前に喜ばれているかどうかです。自分たちはそう思っているかもしれない。こうして集会にも来るし、食事の前に祈っているし、きつと神はそのことを喜んでおられるに違いないと、その判断をするのはあなたではなく神です。

この最後のときに何が起こるのか？新天新地が築かれるときに何が起こるのか？人間は様々な偉業を成し遂げました。しかし、それらは神の前にすべて明らかにされて、神がそれにさばきを下されるのです。こうして、最後のさばきを見るときに、今、私たちはこうして生かされていますが、私たちは考えなければいけません。「私のこの地上での生活、過去のことはもう過ぎ去ってしまったが、この一日、本当に神の前に価値あることをしているのか？していこうとしているのか？」と、私たちが考えなければいけないことはこれではありませんか？

礼拝が終わった後、いろいろなプランがあるかもしれませんが、気を付けなければいけないことは、本当に永遠に価値あるもの、神の前に価値あるものを私たちは選択して、そのように生きているかどうかです。「天国に行けるからそれでいいではないか」と、果たして、そのような考え方、生き方は神に喜ばれるのでしょうか？私たちは神の栄光を現す者として造り変えられたのです。そして、私たちが一番喜んでるのは、私たちが神の栄光を現しているとき、神に喜んでいただくことを私たちが行っているときです。思い出してください、皆さん。神に喜ばれることをあなたがしているとき、あなたはこの上ない喜びをもって生きていたはずです。それを思い出さずして生きていくことです。そして、そのように生きることです。価値のないことのために生きてもそれは虚しいです。神がご覧になるのは、そして、私たちが教えられることは、私たちの人生が価値あるものであったかどうかです。過ぎ去ったことはもう過ぎたことです。これからどのように生きるのか？です。主にお会いするそのときまでどのように生きていくのか？です。神の前に価値ある正しい生き方をしたいなら、みことばに従っていくことです。神が喜ばれることは何かを考えて、それを神の助けをいただきながら選択し続けて行くことです。

ペテロは教会の中に入り込んで来たにせ教師たち、惑わす者、あざける者たちに対して、もう一度真理に立ち返りなさい、もう一度、学んで来たことに立ち返りなさいと兄弟たちを励ますのです。この励

まは私たちにとっても必要です。私たちは基本に戻ることです。何のために生きているのか？だれのために生きているのか？自分で生きているのか？だれかに生かされているのか？生かされているとするなら、なぜ、私をあなたを生かしてくださるのか？私たちはそのことを感謝して、神に喜ばれることを選択しながら生きることです。

どうか、この1週間もそのように歩んでいきましょう。

《考えましょう》

1. 「主の御前では、一日は千年のようであり、千年は一日のようです。」という旧約のみことばは私たちに何を教えていますか？
2. 「主のさばき」がまだ訪れていない理由を説明してください。
3. 「主の日」について、また、その出来事を説明してください。
4. 「主の日」が確実に訪れる理由を挙げてください。